

大正期の青森の美術団体について (1)

對馬恵美子¹⁾

Report on Art of Taishyo era in Aomori Prefecture (1)

Emiko TSUSHIMA

Key Words : 青森県,大正期、美術団体

1 はじめに

5カ年計画で実施した「幕末から明治期にかけての美術調査」は昨年度で終了した。これに引き続き、「大正期における青森県の美術」の調査研究事業を、平成22年度より2カ年計画で実施することにした。今年度は大正期の青森県の美術団体の中から、総合的な団体及び洋画に関する団体について(1)として報告するものである。

2 本県の大正期に設立した美術団体について

本県の大正期の美術団体の動きについては、大正元年から昭和元年までの東奥日報と奥南新報の新聞記事から、美術団体に関する記事を抽出することからはじめた。次の項からは、それらに当時の雑誌の記事や団体の目録等も参考にして、団体毎にその活動と参加した作家(あるいは関係者)等を表にし、その特徴をあげることにする。

今回の調査から大正期の美術団体のうち、日本画(書画骨董関係も含む)に関する団体については、明治期やそれ以前の時代から続く書画会の形式を踏襲するものがほとんどであること、また、明治期に弘前に導入された写真については、大正期になって県内各地に写真の同好会(団体)が盛んに設立されたこと、等がわかった。しかしこの稿では大正期の美術の大きな特徴である本県への洋画の流入に焦点をあて、東京に在住していた本県出身関係者の芸術家の団体について、青森県内の洋画の美術団体等を中心に取り上げることとする。先に述べた日本画、写真等の洋画以外の分野に関しては次の機会に報告したい。

つぎに、取り上げる順序は地域別とし、(1)東京と(2)青森県内のふたつに大きくわけ、県内はさらに①青森市、②弘前市、③木造町、④八戸市の順序とした。

さらに美術団体の活動とは別に、単発的に開催された特別展のうち、大正期において重要と思われる美術展について、数件を取り上げ、3の項で紹介した。

(1) 東京の美術団体について

a 「五星会」 <表1> <表2> 参照

青森県出身者や在住者の中でも、明治以降は芸術の中心地である東京に出ていく芸術家が多かった。その多くは東京美術学校など、美術を専門に教える学校や私塾で学ぶ作家たち、あるいは、東京を本拠地として芸術活動を行う作家達である。

このような、芸術家の中で最も早く団体を設立する行動を起こしたのが、彫刻家の前田照雲である。照雲は大正5年に自分の門下の若い彫刻家に大阪出身の今戸精司を加えた仲間、木彫の展覧会を東京渋谷区にある自宅付近の会場で二日間開催した。<表1>

その、翌年に「五星会」という彫刻の団体を結成、発起人は文学者の秋田雨雀、佐藤紅緑などの文学者たちである。「五星会」という名前は、前田照雲とその門下の三国、鹿内、石戸谷、宮野の5人の集まりからつけられた。この、5人は大正5年の木彫展覧会にも出品していたメンバーである。

<表1> 木彫展覧会

活動名	開催期間	開催場所	出品者(参加者)	他
前田氏木彫展覧会	大正5.7.16～17	前田照雲宅(東京渋谷区)の近くの家に於いて	前田照雲、宮野花香、三国花香、石戸谷津南、鹿内芳洲、工藤翠雲、中野祥雲、今戸精司(大阪出身)	

※参考資料 大正5年8月号 『美術之日本』 前田氏木彫展覧会
東奥日報紙

1) 青森県立郷土館 学芸主幹 (〒030-0802 青森市本町二丁目8-14)

<表2> 五星会

活動名	開催期間	開催場所	出品者(関係者)等
五星会	不明	不明	発起人 田口掬月、青柳明美、秋田雨雀、佐藤紅緑、江部鴨村
五星会 木彫展覧会	大正6.1.20～27	三越新館	三国花影、鹿内芳洲、石戸谷津南、宮野花香、前田照雲
五星会 第2回木彫展覧	大正7.7.5～9	三越呉服店	三国花影、鹿内芳洲、石戸谷津南、宮野花香、前田照雲

※参考資料 大正5年8月号 『美術之日本』 前田氏木彫展覧会
東奥日報紙

b「六花会」<表3>参照

その後、照雲は大正6年に「六花会」を設立する。六花会は津軽英麿、照子夫妻や佐々木嘉太郎の経済的、精神的な援助を受け、日本画、洋画、彫刻に文学も加えたメンバーが集う青森県出身や関係者による規模の大きな団体として、大正9年まで活発な活動を行った。この六花会の特徴は、この会の設立者である照雲の若い芸術家達の育成という理想が、根底にあった。よって、親睦をはかるだけでなく、勉強会、作品の発表の機会の提供、経済的支援などを行っている。しかし、前田照雲自身の創作活動が行き詰まりとなり、さらに照雲の大きな理解者である津軽英麿の死去に伴い、六花会の活動は終焉をむかえる。

<表3> 六花会

活動名	開催期間	開催場所	出品者(参加者)	他
六花会 第1回例会	大正6.3.11	前田照雲宅(東京渋谷)→三橋亭(東京上野山下)	今純三、秋田雨雀、前田照雲、工藤翠雲、中野洋雲、江部鴨村、木谷末太郎、小林喜代吉、西館栄子、石戸谷津南、鹿内芳洲、三国花影 参加者計12名	幹事鳥谷幡山、今純三、秋田雨雀、前田照雲事務所前田照雲宅
六花会 第2回例会	大正6.4.8	前田照雲宅(東京渋谷)→三橋亭(東京上野山下)	前田照雲、鳴海うらはる、江部鴨村、秋田雨雀、工藤翠雨、中野桂樹、今純三、木谷末太郎、小林喜代吉、西館栄子、片山蔵次郎、石戸谷剛、鹿内芳洲、三国花影(慶一)、藤野草明、宮野花香、工藤繁造、森飛雪、笹森清一郎、谷口知夫、吉田義隆、渡辺蔵助、和田山蘭 参加者計23名	秋田雨雀「泰西文学」
六花会 第3回例会	大正6.5.13	津軽英麿伯爵邸(東京麻布区三河寺町)	森飛雪、笹森清一郎、渡辺砂丘、吉田義隆、宮野花香、木谷末太郎、今純三、前田照雲、石戸谷津南、鳥谷幡山、鳴海浦振、越前翠村、江部鴨村、片山蔵七郎、三国花影、西館栄子、工藤翠雨、中野桂樹、工藤繁造、秋田雨雀、藤野草明、谷口ともを、鹿内芳洲、新谷	*名前不明
六花会 第4回例会	大正6.6.17	静養軒(東京上野)	谷口ともを、前田照雲、藤野草明、鳥谷幡山、鳴海うらはる 他不明	
六花会 第1回作品陳列会(第5回例会)	大正6.7.8	静養軒(東京上野)	鳥谷幡山、秋田雨雀、中野桂樹、今純三、木谷末太郎、鹿内芳洲、藤野草明、工藤繁造、鳴海うらはる、蔦谷龍岬、吉田義隆、渡辺蔵助、三上千年、中村旭洋、前田照雲、工藤翠雲、江部鴨村、西館栄子、石戸谷剛、三国花影、宮野花香、越前翠村、和田山蘭、森飛雪、谷口知夫、久保提多、松田菊四郎、佐藤恋、福士幸次郎、佐藤紅緑、薄田漸近雲、中野洋雲、来賓 津軽英麻呂、津軽照子、大谷家令嬢、岩川友太郎、平沢均治、今裕、中野浩、對馬郁之助、今和次郎、熊谷勘兵衛 他不明	
六花会 第6回例会	大正6.11.11	不明	不明	
六花会 第7回例会 例会、三上仙年発会式	大正6.11.18	静養軒(東京上野)	津軽英麿、川村県知事、佐々木嘉太郎、鳴海代議士、工藤道生 参加者計60余名	
六花会 新年宴会特例会(第9回例会)	大正7.1.13	「ときわ」(神田常磐木沢山)	中野如淵、三上千年、中村旭洋、鳴海浦振、藤本美作、蒔苗三千衛、越前翠村、鹿内芳洲、今純三、和田山蘭、松菊衛、三国花影、西館栄子、渡辺蔵助、笹森清一郎、石橋一貫、佐藤恋、石戸谷津南、中野桂樹、石坂富根、片川衛次郎、谷口知夫、森飛雪、木谷末太郎、下山柴栗、蔦谷龍岬、松井百花、秋田雨雀、工藤敬三、前田照雲 参加者計30余名	
六花会 第10回例会	大正7.2.10	三橋亭(東京上野山下)	不明	

活動名	開催期間	開催場所	出品者(参加者)	他
六花会創立記念集会(第11回例会)	大正7.3.10	渋谷「新富士桜」	越前翠村、松井百花、浦春、谷口知夫、森飛雪、前田照雲、秋田雨雀、江部鴨村、今純三、越前翠村、鹿内芳洲、三国花影、工藤翠雲、木谷末太郎、三上千年、参加者計28名	
六花会 第12回例会	大正7.4.14	前田照雲宅	不明	
六花会 第2回展覧会(園遊紀念会)	大正7.4.21	津軽伯爵邸	不明	
六花会 第13回例会	大正7.5.12	前田照雲宅	今純三、森飛雪、前田照雲、秋田雨雀、中野如洋、鳴海うらはる、江部鴨村、花子(仮名執筆者)、石橋一貫、エチ子、松尾敏、白花、谷口知夫	例会委員谷口知夫、松井白花、中村旭洋
六花会 第14回例会	大正7.6.16	三橋亭(東京上野山下)	今純三、前田照雲、石橋一貫、秋田雨雀、江部鴨村、三国慶一、鹿内芳洲、谷口知夫	今純三「後期印象派に就いて」、前田照雲「木彫芸術の変遷について」石橋一貫「蒔絵について」秋田雨雀「戯曲を通じて見られたる人生」
六花会 第15回例会(臨時集会)	大正7.7.14	公会堂(青森県青森市新浜町)	越前翠村、前田照雲、秋田雨雀、谷口知夫、森飛雪、鳴海要吉、西館栄子 他1名	
六花会 懇話会	大正7.9.2	公会堂(青森県青森市新浜町)	不明	
六花会 晩餐会	大正7.9.2	不明	前田照雲、川村知事 参加者30余名	
六花会10月(第16回例会)例会	大正7.10.20	前田照雲宅(東京渋谷)	秋田雨雀、江部鴨村、鳴海うらはる、中井醒郎、和田山蘭、石橋一貫、森飛雪、松尾敏、成田義邦、佐々木武司、前田照雲、片山宋興、中山旭洋、三上千年、三国花影、鹿内芳洲、松田菊四郎、工藤敬三 参加者20余名	
六花会11月(第17回例会)例会	大正7.11.10	三橋亭(東京上野山下)	鳥谷幡山、前田照雲、秋田雨雀、江部鴨村、新屋茂樹、成田義邦、鳴海うらはる、和田山蘭、木谷末太郎、三国花影 参加者24名	成田義邦「生の寂寥と芸術」会員吉崎北陵への弔辞、香典
六花会忘年会(第18回例会)	大正7.12.15	對馬健之助宅(東京)	鳥谷幡山、前田照雲、中野如淵、鳴海うらはる、和田山蘭、蔦谷龍岬、越前翠村、森飛雪、野坂十二樓、木谷末太郎、三国花影、小山内薫、蒔田千三郎、谷口ともを、對馬東奥日報記者、池田東奥日報記者、中村旭洋、工藤敬三、成田義邦 参加者計30名	和田山蘭、越前翠村、木谷末太郎の講演、六花会展覧会の計画、準備委員の決定(森飛雪、中村旭洋、工藤敬三、成田邦義)
六花会 新年会	大正8.1.12	武蔵野(東京下渋谷)	江部鴨村、越前翠村、前田照雲、鳴海うらはる、森飛雪、鳥谷幡山、西館、伊藤、上原、佐々木嘉太郎 他 参加者36名	大正7年会計報告、寄せ書き
六花会 2月例会	大正8.2.9	前田照雲宅(東京渋谷)	秋田雨雀、吉田源三、福士晴堂、鹿内芳洲、江部鴨、前田照雲、小笠原清一、竹森節堂 参加者20余名	江部鴨村「平凡」、前田照雲「馬体学について」
六花会 3周年記念、記念懇親	大正8.3.9	三橋亭(東京上野山下)	秋田雨雀、蔦谷龍岬、中野如淵、前田照雲、和田山蘭、吉田、福士、鹿内、参加者30余名	吉田、福士、鹿内、秋田雨雀「戦後の思想と文芸」
六花会 6月例会	大正8.6.8	前田照雲宅(東京渋谷)	前田照雲、秋田雨雀、江部鴨村、和田山蘭、越前翠村、鳴海うらはる 参加者20余名	前田照雲へ鳴海うらはるより謝辞、新幹事秋田雨雀、越前翠村、谷口知夫、工藤敬三 事務所工藤敬三宅
六花会前田照雲送別会	大正8.7.22	萬盛庵(東京上野広小路)	越前翠村、鳴海うらはる、前田照雲、前田夫人、前田照雲の娘 他	
六花会新年会、北冥会を成立	大正9.1.11	鬼子母神(東京雑司ヶ谷)	鳥谷幡山、秋田雨雀、江部鴨村、池田記者、鳴海うらはる、今周而、今純三、中野桂樹、奈良一男、谷口知夫、工藤敬三、成田義邦、石橋一貫、石戸谷津南、三国花影、鹿内芳洲、武田七、竹森節堂、高橋郁成、秋元良介、松尾敏、福士栄三 参加者計20余名	

※この表は、平成14年発行「青森県史研究題6号研究ノート 大正期の青森県出身の在京美術家団体—六花会、北冥会、白曜会について—」を参考にし作成した。

c 「北冥会」 <表 4> 参照

六花会最後の集まりの時に、六花会メンバーであらたな団体「北冥会」を大正9年に設立するが、照雲に匹敵するリーダーが不在となった北冥会は、例会を開くにとどまり、大正11年頃に自然に消滅したと思われる。

<表 4> 北冥会

活動名	開催期間	開催場所	出品者(参加者)	他
六花会新年会、北冥会を成立	大正9.1.11	雑司ヶ谷鬼子母神	鳥谷幡山、秋田雨雀、江部鴨村、池田記者、鳴海うらはる、今周而、今純三、中野桂樹、奈良一男、谷口知夫、工藤敬三、成田義邦、石橋一貫、石戸谷津南、三国花影、鹿内芳洲、武田七、竹森節堂、高橋郁成、秋元良介、松尾敏、福士栄三 計20余名	
北冥会春季例会	大正9.4.25	小金井	秋田雨雀、鳴海うらはる、越前翠村、谷口知夫、武田達夫、吉田義隆、成田義邦、竹森節堂他 計約8名	
北冥会秋季例会	大正9.10.24	瀧の川紅葉園	鳥谷幡山、中野浩、池田善左衛門、越前翠村、鳴海うらはる 計20余名	
北冥会新年会	大正10.1.23	上野広小路萬盛庵	池田善左衛門、秋田雨雀、鳴海うらはる、成田義邦、武田義七、越前翠村、中村旭洋、石橋一貫、竹森節堂、下山木鉢郎、今純三、谷口知夫、片山宋興、中野桂樹、工藤敬三、石戸谷剛、三国慶一、塩谷興雄、工藤みさを、穴沢起夫 計20余名	
北冥会春季例会	大正10.4.24	鴻の台	工藤翠浦、中野桂樹、三国慶一、早坂三吉郎、竹森節堂、福士晴堂、塩谷興雄、越前翠村 計8名	
北冥会秋季例会	大正10.10.23	瀧の川紅葉園	前田照雲、鳴海うらはる、江部鴨村 計3名のみ	
北冥会江部鴨村氏渡欧送別会	大正10.11.13	瀧の川紅葉園	葛西新八郎、工藤みさを、鹿内芳洲、吉田義隆、越前翠村 計18名	
北冥会春季例会	大正11.4.16	瀧の川楓楽園	江部鴨村、前田照雲夫妻、令嬢、秋田雨雀、越前翠村、片山蔵次郎、中野桂樹、森旭、工藤翠浦、武田義七、早坂五朔、成田義邦、福士黎明、石戸谷剛、鹿内芳洲、中村旭洋、竹森節堂、小林喜代吉	江部鴨村「最近の独逸の文化」
北冥会秋季懇話会	大正11.*	不明	不明	※月日不明

※この表は、平成14年発行「青森県史研究題6号研究ノート 大正期の青森県出身の在京美術家団体一六花会、北冥会、白曜会について」を参考にし作成した。

d 「白曜会」 <表 5> 参照

大正10年には六花会メンバーの中から若い芸術家達が白曜会を設立し、東京で学んだ芸術を郷里に示すことを目的として青森と弘前で4回の展覧会を開催した。白曜会以後、東京在住の美術家達による団体は昭和9年に野沢如洋らが「六華会」を成立したのが最後であり、六華会の活動は短期間で終了した。

<表 5> 白曜会

活動名	開催期間	開催場所	出品者(参加者)	他
白曜会宣示	大正10.4.3	不明	同人一今純三、三国慶一、石戸谷剛、早坂三吉郎、竹森節堂、中野桂樹、工藤翠浦	
白曜会第1回展覧会	大正10.7.14 ～17	長安倶楽部(弘前市)	出品者一中野桂樹、工藤翠浦、石戸谷津南、三国慶一、早坂三吉郎鹿内芳洲、竹森節堂、今純三	
白曜会招待会	大正10.7.16	不明	中野桂樹、工藤翠浦、竹森節堂、早坂寿雲、工藤仙来、篠村祐善、平田補吉、大高善来他	参加者40余名
白曜会新年会	大正11.1.20	白山常盤(東京)	竹森節堂、石戸谷剛、中野桂樹、越前翠村、早坂三吉郎、工藤みさを、工藤敬三、三国慶一、中村旭洋、今純三、前田照雲、武田義七、池田東奥日報記者、萩野哲一	
白曜会招待会	大正11.2	赤十字社支部(青森市)	不明	
白曜会第2回展覧会	大正11.6.17 ～19	弘前市	不明	
白曜会接待	大正11.6.19	カフェーライオン(青森市新町)	越前翠村、中野桂樹、小林喜代吉、中村旭洋、竹森節堂、石戸谷剛、下山木鉢郎、故藤野草明、黎明社諸氏、各新聞記者他	参加者20余名
白曜会第2回展覧会	大正11.6.24 ～26	赤十字社支部(青森市)		

活動名	開催期間	開催場所	出品者(参加者)	他
白曜会新年会	大正12.1.26	梅の井(東京新橋芝口)	中野桂樹、工藤翠浦、工藤敬三、三国慶一、森旭、鹿内芳洲、石戸谷剛、竹森節堂、池田善左衛門、成田義七	
白曜会集会	大正12.2.4	鹿内芳洲宅(武蔵野、中野)	不明	
白曜会集会	大正12.2.	不明	不明	開催日不明
白曜会集会	大正12.5.13	中野氏のアトリエ(東京)	不明	
白曜会第3回展覧会	大正12.6.20~24	赤十字社支部(青森市)	越前翠村、竹森節堂、中村旭洋、伊前忠三、工藤みさを、今純三、小林喜代吉、下山木鉢郎、森旭、石戸谷剛、早坂三吉郎、中野桂樹、工藤敬三、三国慶一、鹿内芳洲	
白曜会第3回展覧会	大正12.6.28~7.1	物産陳列館(弘前市)	越前翠村、竹森節堂、中村旭洋、伊前忠三、工藤みさを、今純三、小林喜代吉、下山木鉢郎、森旭、石戸谷剛、早坂三吉郎、中野桂樹、工藤敬三、三国慶一、鹿内芳洲	
白曜会(第4回)展覧会	大正13.7.11~13	赤十字社支部(青森市)	不明	黎明社主催
白曜会(第4回)展覧会	大正13.7.18~20	物産陳列館(弘前市)	不明	弘前絵画研究会主催
白曜会懇親会・前田照雲追悼会	大正13.7.20	物産陳列館(弘前市)	不明	

※この表は、平成14年発行「青森県史研究題6号研究ノート 大正期の青森県出身の在京美術家団体—一六花会、北冥会、白曜会について—」を参考に作成した。

(2)青森県内の美術団体

①青森市の美術団体について

a「北方画会」(あるいは北方洋画会、北洋画会、北洋会、北洋社) <表6>参照

「北方画会」は東奥日報紙には「北方洋画会」や「北洋画会」とも書かれていることから、明治期の洋画の団体「北洋画会(あるいは北洋会、北洋画社)」と混同されやすいが、それとは異なる青森文芸協会の絵画部として発足した団体である。大正8年に洋画の研究を目的として設立され規則も定められた。それによれば、研究所を設けて毎週日曜日に会員の指導や作品の批評を行うこと、月一回の例会を行うこと、会員には会費を払うとだれでもなれる事などがもまれていた。東奥日報紙には第1回の展覧会と2回目の集会の記事が掲載されたが、同会の単独の記事は昭和9年以降見つかっていない。しかし、大正14年に棟方志功が上京前に開催した展覧会の主催者のひとつとして北洋社の名が出てくるので、この北洋社が北方画会だとすれば、すくなくとも大正14年までは同会が継続していた可能性もある。

<表6>北方画会

活動名	開催期間	開催場所	出品者(参加者)	他
北方洋画会 発会式 第1回 作品展覧会	大正8.3.22~23	青森市 浦町小学校		
北方洋画 第2回集会	大正8.4.20	福井行寄方(青森市 鍛冶町8番地)	福井行寄 他不明	会員相互の作品のコンクールを行う
棟方志功勉学後援展 覧会的主催となる	大正14.9.2~6	南薬舗(青森市)	棟方志功 他不明	主催 青森北洋社、青光画社、弘前北斗社、 西班牙社、木造光陽社 出品点数30点

※参考資料 東奥日報紙

b「青森美術協会」<表7>参照

青森市内の美術団体としては、大正10年に「青森美術協会」が設立される。「青森美術協会」は、洋画の分野にとわれず、日本画、彫刻なども含む総合的な団体で、2年間の短い期間であったが、その間に3回の展覧会、1回以上の講習会を開き、出品点数約130点、中央の帝展の審査員などを務める著名な作家達の作品も展示する、県内の団体としては、大がかりなものであった。

<表7> 青森美術協会

活動名	開催期間	開催場所	関係者	他
青森美術協会 設立	大正10.4.8	不明	不明	美術と美術工芸の発達を図るを目的とする
青森美術協会 作品持ち寄り会	大正10.4.22	水谷宅	水谷、原、利府、東奥日報新聞記者	
青森美術協会 第一回展覧会	発会式(開 会式)、来 賓招待会	大正10.5.25	松原(医師、開会の辞)、工藤(市長、祝辞)、藤原柯芳(祝辞)三浦秋之助(設立の経緯)招待者30余名(詳細不明)	一般入場は26日～
		大正10.5.25～29	赤十字支部(青森市) 石岡透、木谷末太郎(故人)、斎藤竹甫、原韶光、星川清雄、松井静、水谷英一、森旭、山上喜司、山崎政太郎、利府華堂、芥舟、藤林武城、由来*追加 平福百穂、中川(女性)	陳列室は6室(第1室、原、第2～4室日本画、利府、竹甫、第5室は水彩画、スケッチ日本画 出品点数合計約130点
青森美術協会講習会	発会式	大正10.4.11	桔梗学院(青森市浦町) 第1部 日本画 原韶光、水谷英一、利府華堂 他2氏 第2部 図案工芸、武田 他3氏 写生 同会会員は目下35名	同協会で其の一事業として研究会を催し 毎週土、日曜日の2日間講習会を開催 学術の講習もあり 美術史、風俗史、美学、解剖学、投影幾何学、図案法を専門の知識を持った幹部が講義 毎月1回会員の作品展覧会を開き批評 *最終年確認出来ず
第2回美術展覧会 青森美術協会		大正10.11.23～27	赤十字支部(青森市) 斎藤竹甫、鈴木武志、西館栄子、西館弥輔、水谷英一、利府華堂、牧野虎雄、今克己 他	第1室水彩画、油彩画、第2室日本画、参考室の三分類 出品点数百余点 好評に付き一日延長
第3回美術展覧会 青森美術協会		大正11.6.21～25	赤十字支部(青森市) 第1室 工藤繁造、光生、水谷英一窪田源太郎、紫葉他会員(詳細不明) 第2室 三浦秋之助 第3室 須藤旭章 日本画参考室平尾魯仙、晴湖 第4室 吉田博、満谷国四郎、石川寅次、富田温一 他	第1室木彫、洋画 第2室不明 第3室日本画参考室 第4室中央の作家 前売り券発売

※参考資料 東奥日報紙

c 「光洋社」 <表8> 参照

「光洋社」(あるいは光洋画会)は洋画の研究団体として、大正11年頃に設立、大正11年4月22、23日に青森市の公会堂において第一回の光洋社の展覧会を開催、翌年まで2回ずつ計4回の展覧会を開催している。大正13年以降は東奥日報紙上での記載が見られなくなることから、おそらく2年間の活動で終了したと思われる。光洋社は、大正11年の第一回青光画社展覧会と大正12年の第2回青光画社展覧会の後援団体となっている。

<表8> 「光洋社」

活動名	開催期間	開催場所	出品者(参加者)	他
第1回 光洋画会 展覧会	大正11.4.22～23	公会堂(青森市)	斉藤香律男、窪田源太郎、二階十四男、藤林武城、石岡透	
			賛助員、山上喜司、水谷英一	
第2回 光洋画会 展覧会	大正11.6.11～15	松木屋(青森市)	藤林武城、石岡透、斉藤香律男、窪田源太郎、丹野良輔	
第3回 光洋社 洋画展	大正12.7.7～8	赤十字社(青森市)	藤林武城、石岡透、斉藤香律男、丹野良輔、西川正雄、二階十四男	
光洋社	大正12.10.31～11.2	松木屋	藤林武城、石岡透、斉藤香律男、丹野良輔、西川正雄、水谷(青森師範)	※展覧会回数不明

※参考資料 東奥日報紙

d 「青光画社」 <表9> 参照

青光画社(あるいは青光社、青光画会ともいう)は前述した光洋社と同じく大正11年に棟方志功が設立した美術団体で、版画家棟方志功の知名度の高さからも広く知られている、本県の大正期を代表する団体である。青光画社は昭和5年まで、その活動が確認でき、9年間という比較的長い期間続いている。また、関係する画家達も、志功の他に松木満史、古藤正雄、鷹山宇一など、県出身の芸術家として良く知られている人が多いことも特

徴である。さらに、青光画社の第一回の展覧会は前述した光洋社を後援としている他、地域をこえて北洋社（北洋社の斎藤香津男は青光画社の第8, 9, 11, 12回の青光画社の展覧会に出品している）、弘前の北斗社、西班牙社、木造の向陽社とも交流を持っている。

<表9> 青光画社

活動名	開催期間	開催場所	出品者(参加者)	他
青光画社 第1回展覧会	大正11.10.15	新町小学校(青森市)	不明	後援光洋画会。出品点数70余点、洋画主、会費10銭
青光画社 第2回展覧会	大正12.5.20	新町小学校(青森市)	棟方志功、飯島強、齋藤勇也、田中豊治、清水鉄栄、其田勝三等	後援光洋画会。午前8時から午後5時まで開会。
田中豊治 追悼洋画展覧会	大正12.8.25～27	新町小学校(青森市)	田中豊治	午前8時から午後6時まで開会。青光社同人と七尾善之助等が主催。
三氏による絵画展覧会	大正12.11.24～25	新町小学校(青森市)	須藤旭章、山上喜司、棟方志功	第4回青光画会に代わるもの。
青光画社			中止	第4回青光画会の中止の理由あり。「しこう」の署名記事。
青光画社 後援児童画展覧会	大正12.12.2～3	新町小学校(青森市)	新町校の四五年の児童(松下、佐藤、長山、小笠原、坂谷、杉沼、その他女児数名)、	児童作品の油画、クレヨン画50点、青光画社後援出品18点
青光画社 第5回洋画展覧会	大正13.5.23～25	青森館(青森市堤)	※石松斗六、※齋藤勇也(西東湯屋)、※七尾善之助、※藤本健三(健造)、※古藤政雄、※成田実、※其田勝三、※棟方彦七(しこう)、松木満子、故田中豊治他 *出品点数については資料No.9参照	後援新町伊藤書店。公募5月10日迄市役所前棟方しこう迄※同人、同人油絵40点、水彩画20点、木造光陽社の後援出品、当地画壇の後援出品計百点。
青光画社 第6回絵画展覧会	大正13.10.12	新町小学校(青森市)	成田実、藤本健造、七尾善之助、齋藤勇也、石松斗六、松木満子、棟方しこう、山田静浪、大川通平、川口玉鳳、佐藤玉堂、和泉一彦、幸田、堤、和泉一彦、他に、弘前洋画研究会、小学校生徒の作品 *作品点数と技法については資料No.13参照	受付10月5日まで新町青光画社まで。下北、弘前、南郡、東郡、西郡各方面からの後援出品。
青光画社 第7回展覧会	大正14/5/23～大正14/5/27	松木屋デパート(青森市)	※大川通平、※七尾善之助、※藤本堅造、川口玉鳳、※棟方しこう、※成田実、※古藤政雄(正雄)、※其田勝蔵、※松木満子 ※は同人 注-齋藤湯屋(勇也)、石松斗六、故田中豊治は無出品。 出品作品は資料No.16参照。	
棟方志功 勉学後援展覧会	大正14.9.2～6	南薬舗(青森市)	30点	主催 青森北洋社、青光画社、弘前北斗社、西班牙社、木造光陽社
青光画社 第8回展覧会	大正14.11.28～12.4	松木屋デパート(青森市)	田中みのる、佐藤国夫、藤本堅造、七尾善之介、大川通平、棟方志功(在京)、北谷正禄、堤勝三郎、松木満子、齋藤香津男、七尾泰資、石岡倬 *出品作品は資料No.19参照	
第1回青光画社 スケッチ会	大正15/6/6	原別方面	在青同人14名	受付参加希望者は青森市松森16番地大川通平。
第2回青光画社 スケッチ会	大正15/9/5	野内方面		第2回の相談会を兼ねる。現地集合・午前9時まで浦町停車場。9時12分の列車で野内に向かう。
青光画社 第9回洋画展覧会	大正15.9.11～13	赤十字社青森支部	藤本堅造、齋藤香津男、田中みのる、成田みのる、堤勝三郎、山口健三、鷹山宇一、千葉作太郎、澤田米、野元孝祐、岩見悌二、村本良三、七尾善之助、大川通平、松木満子、野間茂子、棟方志功 注1-出品作品は資料No.19参照。注2-棟方志功は白日会、理想美術展の出品作2点も陳列。	公募。入選発表(審査堤勝三郎、齋藤香津男、松木満子、棟方志功)。入場券十銭。同人制度を改め会員、会友制度とする。第1回会員作品互選投票で青光賞3点、松木賞1点、を決定。
青光社 第10回美術展覧会	昭和2.6.4	赤十字社青森支部	新会員-下山木鉢郎 他不明	受付青森市新町131野間方*会場写真あり
第6回 青光画社 写生会	昭和2.7.10	堤川河畔		
画聖ゴッポ追想会(懇話会)	昭和2.7.28	公会堂(青森市)		会費30銭、発起棟方志功、主催青光画社、受付-市役所庶務係
第7回 青光画社 スケッチ会	昭和2.8.14	野内駅付近		集合-当日午前7時半まで堤側河畔諏訪神社。

活動名	開催期間	開催場所	出品者(参加者)	他
青光社 第11回美術展	昭和2.9.9	赤十字社青森支部	入選者氏名-内山梅、大川適平、加藤伸一郎、岡田武、青木陽一、岡田豊、桃井春水、齋藤香津男、佐藤国夫、工藤正義、千葉作太郎、今三夫、長内博洋、奈良岡正夫、柳谷才吉、成田一成、佐藤文康、長山頼正、小館保一、宮本其衛	審査下沢木鉢郎(不参)、松木満史、棟方志功。入選13名36点。
青光社 第12回美術展覧会	昭和3.7.6～8	赤十字社青森支部	会員-成田玉泉、棟方志功、松木満史、古藤正雄、下山木鉢郎、入選一般-千葉作太郎、工藤正雄、北谷まさろく、佐藤国夫、佐藤正夫、川村隆信?、小館善四郎、成田一成、宮本其衛、山口良三、齋藤香津男、大川通平、千葉正三、今三夫、加藤伸一郎、七尾善之助、川中みのる、田沢陸郎、渡辺玄一郎、齋藤清、笹森沙奈恵、平泉健二、岡田武、川口保夫、故成田実 入選子供-小向正、野間茂、中村弘睦、伊藤忠利、齋藤正吉、小川信俊、飛鳥源三、野間伸、川口利夫、木村智吉、一戸勇貴、田中弘恣、佐藤彰一、安田無休	受付新町野間歯科医院内。審査成田玉泉、棟方志功、古藤正雄、下山木鉢郎。入選39名作品55点。川村賞千葉作太郎、田中弘恣。 *川村三ツ川屋材料店の後援により設定。会場写真あり。
棟方、田沢帝展入選	昭和3			
青光社 第13回展覧会	昭和4.9.13～15	赤十字社青森支部	不明	受付日9月9,10日。受付場所野間歯科医院方青光画社。審査青光社会員。会場写真あり。
青光社新会員の知らせ			彫塑部会員 工藤繁造、彫塑部会友 棟方一、洋画部会友 宮本其衛、山口健三、七尾善之助、千葉作太郎	
第14回青光社美術展覧会	昭和5		延期	

※参考資料 青森県立郷土館調査研究年表第28号「青光画社考—棟方志功生誕百年にちなんで」
東奥日報紙
弘前新聞

e 「彗星社」 <表 10> 参照

昭和 11 年設立した**彗星社**は、展覧会の開催期間をきちんと定めないことから、彗星という名前になった。大正 11 年 6 月に松木屋において開催したが、皮肉にも彗星という名の通り、その活動も短期間で終わったと思われる。

<表 10> 彗星社

活動名	開催期間	開催場所	出品者(参加者)	他
彗星社	大正11.6.11～15	松木屋(青森市)	利府華堂、佐藤緑園、山上喜司、水谷英一	彗星社という名は、開催期日をキチンときめないことから付けられた。

※参考資料 東奥日報紙

f 「パレット倶楽部」 <表 11> 参照

パレット倶楽部は大正 12 年に青森師範学校の水谷英一や洋画家の七尾泰資が中心となって設立された洋画の団体で、大正 13 年の間に 1 回の展覧会と 3 回のスケッチ会を開催した。展覧会には棟方志功や今純三(応援出品)らも参加している。志功と美術団体との関連については、興味深い事が判明したので、それについては次の機会に報告したい。

<表 11> パレット倶楽部

活動名	開催期間	開催場所	出品者(参加者)	他
パレット倶楽部	不明	不明	不明	当市師範学校の水谷英一や洋画家七尾泰資が中心となり多くの人たちが集まって面白く描こうということで出来た
第1回 スケッチ会	大正12.10.14	市外 松森	不明	
第2回 スケッチ会	大正12.11.4	市外 野内	不明	
第1回 洋画展覧会	大正12.11.24～27	堤町 青森館	水谷英一、大八木、南部、谷口、児玉、西館、棟方、佐々木、清野、近藤、村田、山崎、齋藤、藤林、西川、七尾泰資、七尾善之助、石岡、平野、応援出品 今純三、谷口知夫	
第3回 スケッチ会	大正13.6.8	浅虫	不明	

g 「コバルト会」 <表 12> 参照

「コバルト会」は大正 13 年に青森師範学校に在学中であった工藤正義らによって創立された師範学校内の美術サークルである。コバルト会創立後 4 年目の昭和 2 年からは今純三が担当し、展覧会を開催した。青森師範学校及びコバルト会で純三から銅版画、木版画等の指導を受けた教え子達は、同校を卒業後に県内で教員となり、版画教育の礎を築くことになる。同会は東奥日報紙の他に『版画教育覚え書』、『葛西四男画集』、同会展覧会目録により、昭和 21 年までの活動が確認できた。

<表 12> コバルト会

活動名	開催期間	開催場所	出品者(参加者)	他
第2回コバルト洋画展覧会	大正13.11.31	青森師範学校内講堂貴賓室		
コバルト会 絵画展	昭和6*	青森師範学校内図画教室	小山篤平、長末彰一部、八戸喜代四、目時正五郎、小島喜代志、江渡益太郎、中島由五郎、千葉貞三、奈良澄、浜中良一、阿部四郎	*開催月日 不明
コバルト会 絵画展	昭和7.11.4~6	青森師範学校屋内体操場	立花良一、毛内洋三、円子義人、阿部四郎、浜中良一、工藤正雄、竹ヶ原寛市六、千葉貞三、中島由五郎、新山半兵衛、佐々木筆太郎、安田善四郎、横田俊三、前田兼太郎、高木正三、佐々木秀雄、東海正太郎、小林茂太、飯田輝夫、佐藤清藏、須藤武男、江渡益太郎、山内庸行、中村一雄、遠藤真夫、北川武城、目時正五郎、山口良三、林武司、佐々木喜代吉、岩谷友蔵、賛助出品 野呂、児玉、今純三	
コバルト会 第1回*美術展覧会	昭和8.10.15~17	青森県師範学校内	立花良一、浜中良一、中島由五郎、白鳥久美、滝沢文三、千葉貞三、江渡益太郎、須藤武男、進藤正一郎、賛助出品 今純三、高田広喜	*この展覧会からあらたに第1回として数えられている
青師展覧会	昭和9.10.20~21	開催場所不明	不明	
青師コバルト展	昭和11.4.25~26	菊谷デパート(青森市新町)	不明	
コバルト会作品発表会 第2回公開制作展覧会	昭和12.6.26~28	菊谷デパート(青森市新町)	不明	
第4回青師コバルト会	昭和14.7.22~23	菊谷デパート(青森市新町)	長谷川皓一、葛西藤五郎、渡辺國丸、桑村 穰、天内惣助、中村毅、小島秀壽、江渡卯郎、笹井成伸、越谷栄一、錦谷正、鹿内徹、斎藤裕次、鈴木武美、清水目勝見、阿部良信、澤口武雄、飯塚乙文、小坂俊夫、對馬義郎、早川芳郎、北沢義雄、千葉壽雄、秋元達夫、賛助出品 今純三、佐藤正夫、江渡益太郎	
コバルト会*	昭和21	不明	葛西四雄 他不明	*展覧会の回数及び開催月日 不明

参考資料

東奥日報紙
 昭和14年 「第四回青師コバルト会展覧一覽」 目録
 昭和54年 津軽書房発行 江渡益太郎 著 『青森県版画教育覚え書』
 昭和62年 株式会社 三彩社 『葛西四雄画集』

② 弘前市の美術団体について

a 「北斗社」 <表 13> 参照

北斗社は関彦四郎(弘前市生まれ。明治43年東京美術学校洋画科に入学。大正4年同校中退し、弘前に帰郷。)が大正7年11月30日に仲間とともに、立ち上げた洋画の団体である。結成の目的は「洋画の研究と目的、更に地方の同じ志を持つものの為に、出来るだけの尽力をすること」としている。同会は、会長、幹事を置かず彦四郎、斎藤(佐々木)順威、笹森精一郎、中村一路、松井澁、多田源蔵、長尾源太郎の7名の同人だけとし、同人の数は増やさないこと、この同人のうちだれか一人でも生存しているうちは、必ず年一回の展覧会を開催する事を堅く約束しあったという。北斗社は当初「弘前洋画同好会」という名で、翌年の大正8年9月に弘前公会堂で第1回の展覧会を開催し、澁を除く6人の同人が、約百点を出品、大正9年の第2回展も同メンバーで約80点の作品を展示した。第3回の展覧会の際には、「弘前洋画同好会」の名を改め、7人の同人ということで北斗七星に因み、「北斗社」とした。またこの会には同人の他に小野忠明(弘前市 明治36~平成6六)が加わっている。北斗社は第7回展から、一般公募を取り入れたり、展覧会以外に素描展覧会も行っている。また、同人以

外には、棟方志功にゴッホの作品を掲載した雑誌を見せ、志功の絵画開眼の切っ掛けをつくったと言われている小野忠明、小説家の平田小六、棟方志功、志功から油絵を習っていた野間茂子（志向の理解者の一人歯科医・野間宏の娘）らも出品している。

北斗社の最後の活動については、中畑長四郎著の「津軽の美術史」によれば、「「こんな時節柄、絵画でもあるまい」という言葉で終わりをつける。」とあることから、戦争が激しくなる昭和14年以降に活動を終わったとも、考えられるが、今のところ昭和9年以降の北斗社の活動を裏付ける資料は見つかっていない。

いずれにしても、大正7年に設立した「北斗社」は、少なくとも昭和8年まではその活動が確認できる。この北斗社の長期間にわたる存続の理由を、順威は「人格者であり、教育者であり、研究者であった関があったればこそ、北斗社は今日の齢を重ね得たのだ。」と語っているが、加えて会の運営面を担当した順威自身の働きも大きいと思われる。

また、北斗社の同人は早くから版画の関わりを持っていた。第4回展の頃と思われるが、佐々木順威によれば「この頃同人達は版画を可成りやっていた。毎月の例会には必ず同人の数分の自作品を持って来て皆へわけ、その場で一冊の版画集を作ったりした。表紙は順番に版画で作ることにし題名も毎月表紙の版画をやる人に一任していた。折角油がのって一生懸命なれた頃一人、二人と県外へでなければならなくなったのが原因で、この面白い企ても遂に途中で廃刊になったことは実に遺憾であった。リアリあり、シュウルリアルあり未来派あり立体派ありといった風で実に面白いものであった。長尾君など建築家だけにとっても線に面白い味を見せていた。」（昭和8年9月29日付け東奥日報紙より）とある。佐々木の文中にある「同人の数分の自作品を持って来て皆へわけ、その場で一冊の版画集を作ったりした。」とあるのは、いわゆる創作版画誌を刊行していたことになり、青森県で最も早い創作版画といわれる昭和5年の創作版画誌「緑樹夢」よりもっと遡ることになる。

<表13> 北斗社（弘前洋画同好会）

活動名	開催期間	開催場所	出品者（参加者）	他
絵画同好会	大正7.11.30	不明	不明	
弘前洋画同好会 第1回展覧会	大正8.9.28～30	弘前公会堂	多田源蔵 中村一郎 長尾源太郎 斉藤順威 笹森清一郎 関彦四郎	
弘前洋画同好会 第2回展覧会	大正9.11.5～7	弘前公会堂	多田源蔵 中村一郎 長尾源太郎 斉藤順威 笹森清一郎 関彦四郎	
北斗社 第3回展覧会	大正10.9.9～11	弘前公会堂	多田源蔵 中村一郎 長尾源太郎 佐々木順威 笹森清一郎 関彦四郎 松井瀨（故人） 小野忠明	
北斗社 第4回展覧会	大正11.10.26～28	商業会議所	多田源蔵 中村一郎 佐々木順威 笹森清一郎 関彦四郎 奈良善五郎 平田小六	
北斗社 第5回展覧会	大正12.9.21～24	物産陳列館	多田源蔵 中村一郎 長尾源太郎 佐々木順威 笹森清一郎 関彦四郎 早野弘太郎 小野忠明 奈良善五郎 坂本秀一郎 平田小六	
北斗社 第6回展覧会	大正13.10.3～5	物産陳列館	多田源蔵 中村一郎 長尾源太郎 佐々木順威 笹森清一郎 関彦四郎 手塚重治 早野弘太郎 小野忠明 奈良善五郎 坂本秀一郎	
北斗社 試作展（第7回展覧会）	大正14.7.4～6	物産陳列館	多田源蔵 中村一郎 長尾源太郎 佐々木順威 笹森清一郎 関彦四郎 手塚重治 早野弘太郎 小野忠明 奈良善五郎 坂本秀一郎	
北斗社 第8回展覧会	大正15.9.4～6	時敏高等小学校	会友 多田源蔵 中村一郎 長尾源太郎 佐々木順威 笹森清一郎 関彦四郎 手塚重治 早野弘太郎 小野忠明 奈良善五郎 坂本秀一郎 入選 對馬力 棟方志功 野間茂子 小野忠麿 福島誠四郎 吉岡正明	一般公募
北斗社 第9回展覧会	不明	不明	不明	
北斗社 第10回展覧会	昭和3.10.28～31	弘前陳列場	不明	
北斗社 第4回素描研究会	昭和4.8.17～30	弘前市時敏小学校	不明	
北斗社 第11回展覧会	昭和4.10.26～28	角は呉服店	不明	
北斗社 第12回展覧会	昭和5	不明	不明	*開催月日不明
北斗社 第13回展覧会	昭和6	不明	不明	*開催月日不明
北斗社 第14回展覧会	昭和7	不明	不明	*開催月日不明
北斗社 第15回展覧会	昭和8	不明	不明	*10月頃開催か

参考資料 昭和47年弘前市立図書館、弘前市立図書館後援会主催「郷土洋画の先駆者展」目録
「昭和48年度読書週間記念 郷土の洋画を開いた人々」目録
中畑長四郎「津軽の美術史」

b 「西班牙社」 <表 14> 参照

「津軽の美術史」によれば、西班牙社は白樺派の運動に共鳴した山鹿（古田）十郎が中心人物で、個を重んじ、後期印象派の傾向を示していたという。その名は棟方辰雄（棟方寅雄の弟）がスペインの画家ゴヤの絵を好んだことから、つけられたという。大正 12 年から大正 14 年の間に 6 回の展覧会が開催されたようである。東奥日報紙の記事から第 4 回展は弘前市の他に、青森市の青森館でも開催されている。棟方志功が上京前に行った個人展覧会の主催（向陽社の他には北洋社、青光画社、北斗社、西班牙社、）のひとつとして加わっている。

<表 14> 西班牙社

活動名	開催期間	開催場所	出品者（参加者）	他
西班牙社 第 1 回展覧会	大正 12.3.18～20	角は（弘前市）	同人 永井邦彦 山鹿十郎 山鹿守一棟方辰雄 出品 邦江礼子（東京） 他	出品点数約 30 点
西班牙社 第 2 回展覧会	大正 12.9.28～29	弘前物産陳列館	山鹿守一、田嶋竹介、小泉一郎、棟方寅雄、永井邦彦、棟方辰雄、斉藤志郎、熊井武美、山鹿十郎	出品点数 25 点
西班牙社 第 3 回展覧会	大正 12.11.3～4	角は（弘前市）	小泉一郎、永井邦彦、山鹿十郎、斉藤吉郎、田嶋竹介、熊井武美氏等	
西班牙社 第 4 回洋画展覧会	大正 13.4.5～7	角は（弘前市）	斉藤吉郎 山鹿十郎 平田小六 永井邦彦 山鹿守一 小泉一郎	出品点数 30 点
	大正 13.4.26～28	青森館（青森市）	不明	
第 5 回 西班牙社洋画展覧会	大正 13.9.6～8	弘前物産陳列館	同人 斉藤吉郎 山鹿十郎 平田小六 永井邦彦 山鹿守一 小泉一郎田嶋竹介 原韶光 会員外 二川原 長内 山鹿慄 斯波梵	
西班牙社 第 6 回洋画展覧会	大正 14.9.5～7	弘前物産陳列館	同人 斉藤吉郎 山鹿十郎 永井邦彦 山鹿守一 小泉一郎 棟方辰雄 会員外 二川原 長内 山鹿慄 斯波梵	出品点数 40 点

※参考資料 東奥日報紙

c 「タイプリス社（糸杉社）」 <表 15> 参照

弘前高等学校の生徒達が 大正 12 年に設立した洋画と写真の団体である。大正 13 年の 1 月と 9 月の 2 回の展覧会を開催しているが、その後の活動については不明である。

<表 15> タイプリス社

活動名	開催期間	開催場所	出品社（参加者）	他
タイプリス社	大正 12 秋	不明	設立	弘前高等学校生徒が組織 *開催月日は不明
タイプリス社美術展覧会	大正 13.1.18～19	弘前高等学校	不明	
糸杉社 絵画展覧会	大正 13.9.27～29	弘前物産陳列所	不明	油絵及び写真等数十点を陳列

※参考資料 東奥日報紙

③ 旧木造町（現つがる市）の美術団体について

a 「向陽社」 <表 16> 参照

向陽社単独の記事として東奥日報紙に掲載されたのは 2 回のみで、五所川原公会堂で開催した向陽社の第 2 回展覧会についてであった。向陽社という名前は旧木造町（現つがる市）にある向陽小学校出身者の 5 人が立ち上げた団体であることからきている。第 1 回展の展覧会と第 3 回以降の活動については、不明であるが、大正 13 年に開催した第 5 回青光画社展に団体名で後援出品していること、棟方志功が上京前に行った個人展覧会的主催（向陽社の他には北洋社、青光画社、北斗社、西班牙社、）のひとつとして加わっていることから、少なくとも、大正 14 年までは存続していたと思われる。

<表 16> 向陽社

団体名	年月日	開催場所	関係者（個人）	他
向陽社 設立	不明	不明	盛忠七、川崎正人、飯田良太郎、水島尚、松木満子の 5 人で組織	木造町向陽小学校出身者の 5 名
向陽社 第 2 回洋画展	大正 13.11.9～10	公会堂（五所川原）	杏忠七、工藤繁造、松木満史、下山木鉢郎、藤野草鳴、棟方志功、齋藤忠作、阿部孫作	
棟方志功勉学後援展覧会	大正 14.9.2～6	南薬舗	不明	主催；青森北洋社、青光画社、弘前北斗社、西班牙社、木造光陽社 出品点数約 30 点

※参考資料 東奥日報紙

b 「土曜会」 <表 17> 参照

土曜会については、昭和 61 年財団法人棟方志功記念館発行『棟方志功記念館 10 年のあゆみ』の「10 周年によせて」の中に竹内俊吉が次ぎのように回想している。「工藤君*と暮らしていたころ、木造町の葛西新八郎さんが中心となって文化サークルのようなものが出来て、私たちもこれに参加した。葛西さんは早稲田大学文学部を卒業した白樺派の文学青年だった。このサークルは美術や音楽についても葛西さんの財力で外国製の美術集やレコードを取り寄せ、私たちにはたいへんありがたいサークルであった。ゴッホやロダンを知ったのも、このサークルのおかげであった。この木造の白樺サークルに、松木満史は常連でいつも出席したが、(以下略)」(文中※工藤は彫刻家の工藤繁蔵のこと) この文中にある「文化サークル」あるいは「白樺サークル」は当時の東奥日報紙には「土曜会」として記載されている。土曜会の活動について、新聞に関係記事が載ったのは大正 12 年 1 月から 7 月にかけての短期間のみで、いつまで活動が継続したのかは不明である。土曜会は美術のみの団体ではないが、竹内俊吉、彫刻家の工藤繁蔵、洋画家の松木満史ら木造出身の著名な美術作家、政治家が参加していること、中心人物の葛西新八郎が、大正期の美術界に大きな影響を与えた白樺派の感化を受けた人物であることから、今後注目されるべき団体であると思われる。

<表 17> 土曜会

活動名	開催期間	開催場所	出品者(参加者)	他
土曜会 第1回会合	大正12.1.6	葛西新八郎宅	不明	
土曜会発会式	大正12.5.12	公会堂(五所川原)	不明	五所川原町に於ける知識階級の人々の発起に依り人格の修養と知識の啓発を目的として会員の談話及び講演をなし名士の講演会等を開催する
土曜会 第2回会合	大正12.2.3	葛西新八郎宅	工藤繁造、竹内俊吉、葛西新八郎、市田登代、鳳至、葛西新八郎	
土曜会 第3回会合	大正12.5.3	不明	工藤繁造、熊井武美、松木尚三郎、對馬兄弟、市田登代	
土曜会 第4回会合	不明	不明	葛西夫妻、工藤繁造、藤川直美、竹内俊吉	
土曜会 第5回会合	不明	木造町大神宮拝殿	葛西夫妻、工藤、藤川、松木(金)、松木尚、横山、津島、竹内医者	

※参考資料 東奥日報紙

昭和61年 棟方志功記念館『棟方志功記念館棟方志功記念館 10年のあゆみ』

④ 八戸市の美術団体について

a 「三角社」 <表 18> 参照

東奥日報社が青森市にあったことから、南部方面の記事はどうしても少なく、その美術団体の情報もごくわずかである。三角社に関しても大正 3 年の絵画展(何回目かも不明)とその慰労会のみを知ることができる。ただ、関係者の稲垣昇は明治 44 年に開催された三本木アマチュア倶楽部が開催した洋画展にも出品しており、三角社でも主要な人物と推測される。

<表 18> 三角社

活動名	開催期間	開催場所	出品者(参加者)	他
三角社絵画展	大正3.9.1~3	八戸市尋常小学校	杉尾大作, 天外陽子, 菊池矢十彦(菊池夕霞)、松本萬吉、金田年三、小澤鐵壺、稲垣昇、江間(名字のみ)、海野篁	絵画展(300点出品)
三角社慰労会	大正3.9.12	御慶●記念会堂(八戸市長横町)	嶋田卓二、稲垣昇、他 梁瀬小学校長、新聞記者、一般会員 20 名	●は判読不明

*参考資料 奥南新報

3 年代別 単発の展覧会について

美術団体による活動については、前述したが、ここでは単発的に大正期に青森県で開催された美術団体以外主催の展覧会のうち、本県の美術史の上で重要だと思われるものについて述べる。

a 「飛雪・木谷の洋画展覧会」 会期 大正7年7月20日～22日 会場 公会堂（青森市）

大正7年6月に帰青した森飛雪が「日蓮尊像画会」（森飛雪が描いた日蓮の肖像を購入希望者を募って頒布する会）を開催する旨を東奥日報紙に掲載、それに併せて「洋画展覧会（当初個人連合展覧会）」の開催についても告知した。「洋画展覧会」の主催者は、明治期に設立した北洋画会のメンバー木谷末太郎と森飛雪の二名である。同展には青森市出身の作家の作品及び木谷、森のそれぞれの師の作品を加えた計百余点の作品を公会堂2階の3室に分けて展示した。観覧料は無料、ただし下足料1銭。開催二日目で用意した1700枚のちらしが無くなったとあることから、会期中は2000人を超える入館者があり、大成功に終わったようである。

出品作家及び点数は次の通りである。木谷末太郎50余点、森飛雪20余点、故藤野草鳴13点、越前翠村4点、西館栄子8点、木谷の師の岡田三郎助油彩画1点、木谷末太郎の師牧野虎雄の油彩画3点、他石野隆、阿部、松田義作、石橋一貫、笹野天洞、水木伸一ら各1点。

また、この展覧会の会場で木谷末太郎の自画、自刻による版画「青森風景絵葉書」5枚一組を10銭で販売している。このことから、木谷は創作版画家としても、本県の先駆けのひとりと推測される。

b 「青森美術展覧会」 会期 大正7年11月2日～3日 会場 公会堂（青森市）

大正7年の11月2日から3日まで青森市公会堂にて「青森美術展覧会」が開催された。同展は青森師範学校の阿部、青森女師範学校の松田、青森中学校の石野三教諭が発起したもので、川村前知事、阿部市長を顧問（後援）とした。総出品は約200点、出品者50余名。

出品作家と点数は次の通りである。洋画の分野は小笠原精一が15点、松見栄が12点、田澤草鳴が13点、藤林武が5点、国井喜太郎が2点、室瀬吉五郎が5点、駒谷富士雄が6点、田澤啓が35点、藤浪祺一郎が1点、柿崎勝広が2点、福井行枝が5点、吉谷正が32点、竹内健蔵が15点、木谷末太郎が2点、日本画の分野では、澤猪太郎が3点、玉置泰次郎が6点、坂田得齋が3点、松田芳雪が11点、阿部忠助が7点、石野隆が10点、特別出品として丸山晚霞が2点、日本画の本方秀麟が2点、津端道彦、井沢蘇水が1点、洋画の小坂笛太郎が1点、牧野虎雄が1点、間山孝治が1点、中林遷が1点。

c 弘前美術展覧会 会期 大正7年11月22日～24日 公会堂（弘前市座主町）

「芸術の向上発達を図り兼ねて一般公衆の美術思想普及」を目的として在弘の画家、寺島天真、八戸鶴静、今拘夢、竹森節堂、清野八之助が発起し、11月22日から3日間弘前市蔵主町公会堂で美術展覧会を開催した。

d 泰西美術複製展覧会 会期 大正11年10月1日 赤十字支部（青森市）

大正14年10月1日～3日 商工会議所（弘前市）

大正14年10月5日～7日 赤十字支部（青森市）

大正期の日本の美術界に大きな影響を与えたもののひとつに、武者小路実篤、志賀直哉、有島武郎ら同人によって、明治43年に創刊された「白樺」の活動がある。「白樺」は基本的な性格は文芸雑誌であったが、美術雑誌の性格も備え、クリムトなどの象徴主義の画家の紹介記事、ロダンの特集、セザンヌ、ゴッホ等の後期印象派、マチス、ムンクらを図版と文章で日本に紹介した影響は絶大であり、この影響をうけた岸田劉生は大正元年にフェウザン会と名付けた展覧会を開催した。フェウザン会は2回の展覧会を開くに留まったが、後期印象派からフォービズムに至る在野の革新的、かつ個性強調主義の集まりとして、大正期を代表する団体となった。

武者小路はさらに、理想的な調和社会階級闘争のない世界の実現を目指し、大正7年に宮崎県に「新しき村」を建設した。本県でこの動きに賛同した淡谷悠蔵は新しき村青森支部を立ち上げ、新しき村所蔵の西洋の美術作品の複製画の展示会を、大正11年と大正14年の2回、本県に招来した。

大正 11 年の展覧会は、新しき村青森支部主催、青森美術協会の後援にて「新しき村」の所蔵の泰西美術の複製 180 点を 10 月 1 日に青森市の赤十字支部で開催した。これにあわせて武者小路実篤も 10 月 8 日来青し、青森市の公会堂で講演会を開催している。この展覧会に展示した作品は、複製画ではあるものの、ヨーロッパの美術品の数々を県人が目にした画期的な出来事であったと思われる。

大正 14 年には、同じく新しき村青森支部主催にて、泰西美術複製展覧会が 10 月 1 日から 3 日まで弘前市の商工会議所に於いて開催、引き続き 10 月 5 日から 7 日まで青森市の赤十字支部でも開催された。東奥日報紙によれば、同展にはジオット、アンゼリア、マンテナ、ダビンチ、ミケランジェロ、レンブラント、ミレー、セザンヌ、ゴッホ、マリーローランサン等の複製が展示されたとある。また、前回と同様に大正 14 年 10 月 15 日に武者小路実篤が来県し、弘前高等学校において「文芸に就いて」と題し、講演会を開催した。

**e 総合趣味展覧会 会期 第一会場 大正 15 年 10 月 23、24 日 公会堂（青森市）
第二会場 24、25 日 赤十字支部（青森市）**

東奥日報社は 1926 年 3 月 7 日付けの新聞紙上で、同紙が 12000 号に達したのを記念して、読者の愛顧に酬いる為として種々の催しものの企画を発表した。春の県下リレー、レース大会に始まり、書籍「青森大観」（全県にわたる産業文化を紹介しその振興を計るのを目的とした）の発行、記念文芸や市政に関する論文の募集、読者余興の募集等、そして芸術の秋を彩る「総合趣味展覧会」であった。

「総合趣味展覧会」の内容は、芸術写真、児童自由画、アマチュア美術、活花、新古書画で、対象は子供から大人、素人から玄人まで、分野は絵画、書、彫刻、工芸、写真、活花を含む広範囲にわたり、「総合趣味展覧会」という名前が示す通り、芸術の一大展覧会であった。これらの中で、写真と児童画は県内から公募された。写真の審査は、当時の日本の写真界で著名な秋山徹輔、淵上白陽の県外の二人に依頼した。写真の応募数は約 100 点で、この中から秋山、淵上両氏で 16 人を選出、一等から五等までに賞品が与えられ、写真の入選者には小島平八郎と石橋平次郎のふたりが一等の賞を得ている。

児童自由画は県下各小学校から 467 点の作品が寄せられ、審査員として今純三、西館弥輔、南部興鎮、大八木定治、山口諒司が当たり、合計 133 点が選ばれた。

新古書画は同社が最も力を入れた部分で、「本市の家宝展覧会と言えるもの」として、青森市内に住む美術愛好家が所蔵する明治以前の著名な人物の手になる書画 55 点、現代及び明治時代の書画家のもの約 110 点を借用し展示したもので、紙上の記載によれば、土佐光起「竹に菊」文晁の「牡丹」一休の画賛などの名が挙げられ、同紙の発表によれば、新古書画展の会場には、三時間で約四千人の入場者があった旨を伝えている。

この他にアマチュア美術は青森市内の素人からなる美術団体である桂門会の人たちを中心とした作品を展示、さらに青森市内で一番大きい花道の団体である遠州流による活花 53 点がならんだ。

会場は出品点数が多いため、二つに分け、第一会場は青森市公会堂において、大正 15 年 10 月 23、24 日の両日、芸術写真、児童自由画、アマチュア美術、遠州流插花、さらに中野桂樹の彫刻 2 点、三国慶一の彫刻一点に盆石も加えてを展示。第二会場は赤十字支部で新古書画を展示し 10 月 24、25 日の二日間開催した。

この「総合趣味展覧会」は入館者も多く、成功の内に終了した。これにより東奥日報社は次の美術展開催への自信を深め、昭和初期から戦後まで続く東奥日報社主催の「東奥美術展」へと発展していくことになる。

4 おわりに

2 の項であげた美術団体に、他の分野（写真は除く）の団体も含めて、大正時代の青森県内の美術団体をまとめて図にしたのが <図・1> である。また、3 の項であげた主要な展覧会についても、同図に◎印で示した。

以下、今回の調査から判明した本県の大正期の美術界について、その特徴を述べ、まとめとしたい。

青森県の大正期時代の美術の特徴について

・本県の美術界に大きな役割を果たした昭和初期から昭和 30 年代（児童の部は現在も継続）まで続いた東奥美術展の先駆けとなる団体となった六花会、北冥会、白曜会が、大正初期に東京在住の本県出身や関係者である作家達によって設立された。

・明治期末に青森県内に初めて設立された洋画の団体が、大正期に入ると青森市、弘前市、八戸市、木造町（現つがる市）の各地にも、次々設立されるようになり、活発な洋画の展覧会の開催や勉強会などが行われるようになった。

・大正期の中央の美術界の特徴でもある白樺派の影響は本県においても同様に、西班牙社、土曜会など白樺派の影響を受けた美術団体の設立や、全国各地で開催された泰西美術複製展覧会が県内でも開催されしていたことが確認できた。また、この美術展開催によって、セザンヌやゴッホなど後期印象派の外国の作家達の作品を、本県の人々の多くが知るようになったものと思われる。

・青森県の創作版画の活動について、創作版画誌「緑樹夢」の刊行がそのはじまりと考えられていたが、大正期に設立した「北斗社」のメンバーが関わっていた創作版画誌の発行まで、遡れる可能性がある（ただし、その版画誌の所在は確認できていない。）。また、本県の美術作家で最も早く版画をはじめたのが下沢木鉢郎とされていたが、大正7年に青森市で開催した洋画展に木谷末太郎の木版の絵葉書が制作されていたことが判明したことから、あるいは木谷末太郎の方が早い可能性もある。

